

京都市長期ビジョン（仮称）骨子案

- 本骨子案は本審議会（第4回）で再度の議論が予定されております。
- 本日は主に構成に関してご意見を頂戴できればと考えておりますが、これに関連して個別の主題や表記についてのご意見も歓迎いたします。
（章・節・小見出しの表記及び記載内容のイメージはともに議論用に暫定したものです。また、本審議会（第4回）以降も起草過程で適宜修正が生じる見込みです。）
- 【文字数目安】は事務局提案に則っております。これらに序文・市長挨拶・目次（計2,000字程度）を加えた合計10,500字程度の仕上がりを想定しております。
- 世界文化自由都市宣言の理念と過去25年間におけるグローバル化・デジタル化を踏まえて、世界における京都市の役割を意識した構成を採用しております。
（特に当該宣言の第一段落の「世界の現状の正しい認識と自己の伝統の深い省察」の上での市民の努力による世界史への貢献を念頭に各章を構成しております。）

章	節	小見出し	記載内容のイメージ
第一章 長期ビジョン策定の背景 【1,000字 p. 1】	第一節 世界文化自由都市宣言（1978年） －世界史を担うまち【300字】	（なし）	桑原武夫氏と梅原猛氏による起草を経て策定。「都市は、理想を必要とする。」という一文に始まり、「世界の現状の正しい認識と自己の伝統の深い省察」の上での世界史への貢献可能性に触れつつ、平和のもとでの世界文化交流を都市理念として提示した。
	第二節 京都市基本構想（1999年） －21世紀の到来を見据えて【300字】	（なし）	鷺田清一氏による起草を経て策定。地方自治法の定めに基づき、都市理念たる世界文化自由都市宣言を踏まえて、21世紀、特に2001年から2025年までの四半世紀における京都市政の基本方針を提示した。
	第三節 長期ビジョンの策定（2025年） －「都市の理想」を再び掲げて【400字】	（なし）	今次の策定。地方自治法の改正を経て基本構想策定は自治体の義務ではなくなったが、世界文化自由都市宣言で触れられている都市の理想の必要性に鑑み、時代の変化も踏まえながら、2026-2050年の四半世紀における京都市のビジョンを提示する。
第二章 京都市の成り立ちと これまで 【1,500字 p.2】	第一節 悠久の自然との共存の中で【400字】	（なし）	京都市のまちを育んだ基底である京都三山・鴨川・琵琶湖疏水等の豊かな自然環境に言及するとともに、これらとの長い共存関係の中で醸成されてきた自然観（人間を自然の一部と捉え、後者を開発や持続の対象として分離・客体化しない）にも触れる。
	第二節 歴史の重なり、文化の奥ゆき、 ひとの連なり【600字】	（なし）	京都市の歴史が政治・宗教・経済等の盛衰の中で重層的に紡がれてきたこと、この歴史の中で芸道・工芸等の多様な文化様式が形成され継承されてきたこと、そして、この歴史と文化が京都市の多層的な生活圏と人間関係を育んできたことに言及する。
	第三節 矜持と節度、夢中と静穏のもとで ひらかれたまち柄【500字】	（なし）	求心力と遠心力が両立する京都市のまち柄について、その背景にある矜持と節度、夢中と静穏という二つの両面性に触れながら言及する。また、京都市の文化や産業が市外との関係下で成立してきたことや、これを支えた市民の主体性・進取性にも言及する。

世界文化自由都市宣言の
「自己の伝統の深い省察」
と対応。

章	節	小見出し	記載内容のイメージ
第三章 京都市のいま 【2,700字 pp. 3-4】 <div style="border: 1px dashed red; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 世界文化自由都市宣言の 「世界の現状の正しい認識」 と対応。 </div>	第一節 前四半世紀における 世界の動き 【1,300字】	人口動態・産業構造の変化【200字】	いわゆる先進国における少子化・高齢化、グローバルサウス興隆、これらと相補的に進む市場・生産拠点の移行、富の偏在等。
		デジタル化の進展【200字】	SNSの普及とアテンション・エコノミーの深刻化、フェイクニュースの氾濫、AI技術の勃興、国際ルール形成や規範共有の難化等。
		環境問題・自然災害への対応【200字】	気候変動、森林破壊、海洋汚染、海面上昇、大気汚染、地震・津波等とこれらへの対応等。京都議定書発効後の経過にも触れる。
		感染症の脅威への対応【200字】	COVID-19の世界的流行と対応、その後の経過等。
		差別是正への取組【200字】	DEI（Diversity, Equity&Inclusion）の世界潮流等。
		戦争・紛争の持続と激化【200字】	イラク戦争、ロシア-ウクライナ戦争、イスラエル-パレスチナ紛争、経済安全保障の重要性の高まり等。
		ESG/SDGs等の成果と限界【100字】	二元論的/要素還元主義的規範に基づくグローバルアジェンダへの反発顕在化、京都市的/日本的な視座や文化交流の可能性等。
	第二節 基本構想策定以降の 京都市のすがた 【1,400字】	人口動態の変化【200字】	少子高齢化、人口減少、地縁の希薄化、外国籍市民の増加等。
		産業構造の変化【200字】	市民総生産の横ばい推移、インバウンド観光客の急増、伝統工芸等の担い手の不足と高齢化、スタートアップ増加等。
		環境負荷低減と防災の取組【200字】	エネルギー消費量約3割減、ゴミ量23年連続減、水害・土砂災害の増加とこれらへの対応、巨大地震への備え等。
		医療・社会福祉の取組【200字】	COVID-19への対応、医療・社会福祉の担い手の不足・高齢化、差別是正への取組等。
		教育・研究の取組【200字】	小中高での伝統文化体験増、大学生増、複数のノーベル賞受賞、産学連携推進等。
		文化都市としての取組【200字】	伝統文化・史跡保全の取組、これらの維持管理の費用問題、文化庁移転、京都市立芸大移転等。
		市民参加の取組【200字】	未来まちづくり100人委員会の取組等。

章	節	小見出し	記載内容のイメージ
第四章 京都市のこれから 【3,400字 pp.5-7】 世界文化自由都市宣言で提示されている ・市民の努力の重要性 ・世界文化交流の中心としての京都市 ・世界史への貢献可能性と対応。 第二章の三節と第四章の三節を対応させる形で構成。 第三章第二節で言及した京都市の現状への対応も、各論に入り込み過ぎない形で記載する想定。	第一節 自然への畏敬と感謝を抱けるまち 【1,000字】	(要否含め検討)	「持続可能な開発」が提唱され、自然体験の需要も世界的に高まる中で、京都市においては、自然を開発や消費の対象として客体化してきた過去数世紀の姿勢そのものを問うていく。自然環境それ自体の保全と併せて、今後の非西洋圏の興隆も念頭に、人間が本来的に自然の一部であるという自然観/人間観を提示し続けていくことで、京都市と交わる様々な思想圏の人々が自然への畏敬と感謝を発見・確認できるようなまちであり続ける。この際、この自然観/人間観が宿る文化様式と生活様式－景観から建造物、和食や服飾に至るまで－の保全も一体的に推進していく。
	第二節 歴史と文化を介して人間性を回復できるまち 【1,000字】	(要否含め検討)	アテンション・エコノミーの潮流下で人間や社会を見据える視座が即時的・表面的なものになり続けていく見込みであるところ、京都市においては、1,200年の歴史に立脚し、長期的な時間軸と深い文明観を世界に提示していく。現在を生きる私たちが過去の歴史に生かされながら日々新たな未来を生きているということの意義と幸運を噛み締めながら、先人たちの献身と創意によって成立し残存してきた人間的遺産の数々－史跡から工芸・芸道に至るまで－を継承・保全するとともに、これらの歴史と文化を介して、京都市と交わる様々な文化圏の人々が人間性に回帰しこれを回復できるまちであり続ける。
	第三節 自他の生をともに肯定し尊重し合えるまち 【1,000字】	(要否含め検討)	デジタル化が人類社会における個人主義的傾向を強化していく中で、京都市においては、人間が本来的に生身の関係において存立していることを提示していく。京都市に今なお残存する人間的つながり－地縁や職業、学事、祭事、稽古事、ひいては名も無きかわりに基づく共同体－を保全していくとともに、あらゆる構造的暴力－差別から貧困ひいては孤立に至るまで－の解消と予防に尽力していく。また、地域社会のみならず国際社会の一員として、互いの歴史、文化、自然、そして人の在り方を尊重し合いながら、京都市と人類社会の双方の恒久の平和と共栄に貢献していくべく、世界文化自由都市で掲げられた世界文化交流の中心のまちであり続ける。
	第四節 京都市民のこれから 【400字】	(要否含め検討)	本章の第一節から第三節で述べたまちのあり方を実現し続けていくにあたっては、京都市政のみならず、京都市民の主体的な参画が不可欠である。そして、このような市民の主体性が京都市のみならず世界史に貢献し得るということは、豊かな自然・長い歴史・奥深い文化を有する京都市の代え難い魅力であり幸運でもある。京都市政および京都市民においては、世界文化自由都市の実現に向けて、不断の努力を重ねていく。